発表：9-10 年生スタンダード実践授業

中西令子（モンゲニ統合学校）

＜資料の補足＞

- モンゲニ学校としてはスタンダード実践を初めて 2 年目だが、自分自身は昨年度はアドバイザーのような立場だったため、実際に自分がスタンダード授業を行うのは今年度が初めて。
- 以前は『ひろこさんのたのしい日本語』という教科書を使っていた。本文を読み、言葉を教えていた。子どもたちの身近な生活ではなく、教科書の中の世界だった。
- 10 年生は昨年度からスタンダード授業を始め、今年度で 2 年目。昨年度、家族というトピックで授業を行ったが、そのトピックに 3 か月かけたところ、学習者も教師も従前のやり方に戻ってしまった。そこから、だらだらするものではないということを学んだ。
- 10 年生で、旧正月（ツァガンサル）の時に、それに合わせた授業を行った。日本人をうちに招待するところから練習し、そのための電話のかけ方から学んだ。夜遅くかけてはいけない、「今いいですか」と聞かなくてはいけない、等も教えた。10 年生だから気持ちを込めた言い方を知ったほうがいい。
- ロールプレイで、食事をして、お客さんにおみやげを渡すところもやった。モンゴルの習慣でお客さんにおみやげを渡すが、その理由も説明もできるようにした。
- しかし、今のスタンダード授業も好評価ばかりではない。9 年生に話を聞いたところ、3, 4 人は、スタンダード授業はよくわからない、『ひろこさんのたのしい日本語』に戻りたいと話している。その理由は、前の教科書のほうが絵が大きくて分かりやすい、ストーリー性がある等。すぐにすべてを変えるのには生徒も抵抗があるので、ゆっくりと変えていくほうがいい。
- そのような理由から、スタンダード授業は低学年のうちから実施していったほうがいいとも考える。
- また、一方で、今はスタンダードに縛られすぎている感もある。もっと自由にしたい。たとえば、以前に使っていたフラッシュカードが何百枚もある。すべてを新しくしなくてもいいのではと思う。
- モンゴルの子どもたちはなかなか素直に自分の考えが言えない。教師が期待する答えしか出てこない。日本語の授業を通して自分のことが言えるようになってほしい。

・ポートフォリオの意味と重要性がようやく分かってきた。単なる「紙ばさみ」になってはいけない。学習者が自分の勉強を自分で管理して、他人にアピールできるようにならなくてはいけない。一緒に作り上げていきたい。
・今年度特に工夫した点の１つに「ルーブリック」がある。授業ごとに作成して学習者に配布し、授業の目的や自分のレベルを分かるようにした。ルーブリックは日本語で作成し、学習者に配布後、モンゴル人教師がそれをモンゴルに訳して読み上げ、学習者が自分でモンゴル語を書いていく。自分で書くほうが、心に残りやすいだろうと考えてのこと。
・その他変わったことは、学習者の机。以前は LL 教室のように一人一人が分断された机で、教師にも高い教壇があった。今は普通の机に変え、9 年生はコの字型に机を並べお互いが見えるようにしている。

＜ビデオによる授業風景の紹介あり。＞
・コの字型に机を並べている。
・スタンダード授業になってから、みんな積極的に手を挙げるようになった。